「八重山毎日新聞」
2009年11月07日付、9面

論壇

八重高で「八重山―台湾の国際社会学」を講義して

琉球大学法文学部准教授　野入直美

大学の教員が高校で行う「出前授業」を、10月26、27日に八重山高校でさせていただいた。この講義は、これまでに体験したことのない、私自身にとって得難い出会いと学びの機会となった。

授業では、与那国島の漁民が愛用している、カジキ漁に用いる漁具「つばくろ」の台湾製のものと日本製のものを生徒たちが実際に触って比べたり、台湾、沖縄、内地で用いられている線香のにおいや長さを比べたりして、具体的なモノから台湾と八重山の近しさを感じる試みを行った。

続いて、生徒たちは「八重山毎日新聞」のデータベースを用いて検索し、石垣島の台湾系の人びとが行っているお祭りなどについて調べ、クラスで発表した。

強く印象づけられたのは、八重山高校の高校生たちの、協働能力と発信力の豊かさである。ここの生徒たちは、協力して作業にあたり、みんなで取り組むことに慣れている。協働が身体化していることを感じさせられた。

また発表にあたって、新聞記事に書かれていないことにも想像を膨らませ、積極的にパフォーマンスを行う生徒がいて、その際立った発信力にも感銘を受けた。

一方で、石垣島に台湾系の人びとがいることと自体を知らない、彼らがパインや水牛を石垣島にもたらしたことを知らない生徒たちが多かった。私のような、内地で生まれ育った人間にとっては、このような石垣島の多文化性や海を越えた人と人との結びつきは、興味の尽きないことなのだが、その面白さを、地元の若者たちはあまり知らないということが分かった。

たとえ同じ学校の中に台湾系の生徒がいたり、祖父母が台湾に疎開に行った体験があったりしても、ほとんどの生徒たちはそれを知らない。台湾との結びつきは、自分自身や友達、地域に深くかかわることとして認識されてはいないようだった。

しかし、高校生たちは、好奇心は旺（おう）盛なのである。授業の感想文には、「台湾人がパインを持ってきてくれたように、石垣島の人間が台湾にもたらしたものはありますか」など、こちらをうならせるような鋭い質問がたくさん記されていた。

きっかけがあれば、いちいち教えなくても、調べたり体験したりして、地域社会に眠っている豊かな歴史や今後の交流の資源を、若い世代が自分で掘り起こしていけるだろう。そのような学びの潜在力は、石垣島の社会そのものが持っている豊かさと結びつく。そうすれば、国境を越えた交流の新しい段階が、学びの場から立ち上がっていくのではないだろうか。

今度、石垣島に寄せていただくときは、私が一方的に教えに来るのではなくて、若い世代のみなさんや石垣島で働いておられる先生方と一緒に、そのような地域の将来につながるような学びのかたちをつくっていきたい。また、石垣島だけでなく、宮古や与那国でも出前授業をさせていただきたいと考えているので、ぜひ声をかけてください。

今回の授業は、トヨタ財団による研究助成「海の東アジアが醸成する文化」（代表者：県立広島大学・上水流久彦）、文科省科学研究費補助金研究「近・現代における八重山―台湾間の双方向的な人の移動と地域の変容」（代表者：関西大学・水田憲志）による成果還元の一環として行った。トヨタ財団の関係各位、科研の共同研究者のみなさんにお礼を申し上げます。